

出すというデメリットがあるため、それを放出しない人工材料と木材を併用して作品を良い状態で残す取り組みを行なっている。このことから作品を展示する環境を調節するだけでなく、数多くの作品を後の時代に受け継ぐために保存の環境に關しても様々な取り組みが行われているということを知ることができた。

また、作家が制作した作品を当時の状態を保ち、作品への介入を最小限に抑えることが修復の基本とされている。しかし、作品の性質によっては保存や修復が困難なものも出てくる。その際に、作家が存命のうち作品の保存についての話し合いを行い、その記録を残しておくことも重要である。これらのことから作品を修復する時には、「状態を良くする」ことではなく、「制作された当時の状態をできる限り維持する」ことを最優先で考え作品を後世に「のこす」取り組みが行われていることを知った。

#### おわりに

現在、美術館や博物館などで鑑賞が可能である作品は、修復作業という「てあて」、作品を「まもる」環境づくり、そして、その作品を後世に「のこす」という取り組みを経て、我々のもとに届いているということを知ることができた。これらの活動は、今後も増え続ける作品にとって必要不可欠なものであり、これらの取り組みを「まもり」、「のこす」ことも未来の芸術文化に繋げるために必要であると考えた。

今回の展覧会を通して、修復作業の内容、そして作品を守り、残すための取り組みを知ると共に、その重要性を強く感じた。しかし、修復作業の後継者はいるものの、修復作業を行う場所が少なく、国からの支援も十分ではないため厳しい現状であるということを知り、今回の展覧会を企画し、実際に現場で作業を行なっている

る学芸員の橋口由依さんが教えてくれた。これを受け、この取り組みがさらに広まり作業場や支援などがさらに拡大し充実した体制が整えられることを願う。

#### 【参考】

●「鎌倉別館40周年記念  
てあて・まもり・のこす  
神奈川県立近代美術館の保存修復」配布資料

●会場解説文

【図版出典】

図1、2

神奈川県立近代美術館



野外彫刻・柳原義達《犬の唄》  
(1983年)の前で

秋山ゼミナール

## 「横浜トリエンナーレ」

## フィールドワーク

外国語学部 中国語学科3年

水上成実・塩家亜胡・土屋恵・廣田葉奈

柳沢慶介・寺崎大悟・池田亜美香・伊東美秋

2024年3月15日から6月9日まで、みなとみらい地区で開催された国際展、横浜トリエンナーレのテーマは「野草・いま、ここで生きてる(野草・我們的生生活)」である。北京を拠点にも活躍するリウ・ディン(劉鼎)とキャロル・インホワ・ルー(盧迎華)は、中国の文学者、魯迅がほぼ100年前に書いた短文集『野草』に基づいて、災害や戦争、大量消費による環境破壊など、私たちが直面している現代の状況をそれぞれの方法で捉えた作品群をキュレーションしている。私たち秋山ゼミは、5月7日にこの横浜

トリエンナーレでフィールドワークを行った。ここでは、ゼミ生8人それぞれが最も印象に残った作品について展示順に従い紹介する。

#### 水上成実

私は横浜美術館に入ってからすぐに展示された、ウクライナの複数のアーティスト、オープングループによる《繰り返ししてください》が印象に残った。ウクライナ戦争で実際に聞こえる爆弾や銃弾、戦闘機を模した大きな音が館内に響き、作品名の通り、「繰り返しそう」と思ったが、模倣した声から戦争や人間の怖さを感じ、繰り返し返せなかった。

「声を出してみる」という新しい形の作品をぜひご覧いただきたい。

#### 塩家亜胡

私が特に印象に残っているのは、志賀理江子の《霧の中の対話：火―宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》という作品である。この作品は、鹿猟師である小野寺さんに写真家の志賀さんが実際に行ったインタビューを、そこで撮った猟の写真と組み合わせ提示する内容になっている。作品に使われている写真は、実際の猟の様子に加え、解体の場面や処理し終わった後の無数の骨など、生々しくもリアルティ溢れるものだ。この作品には猟師の心情や、食べ物に感謝するという言葉の真の重みなど、様々な事を考えさせられるため、是非多くの人に見てもらいたい。



志賀理江子  
《霧の中の対話：火―宮城県牡鹿半島山中にて、食猟師の小野寺望さんが話したこと》  
(撮影：塩家亜胡)



オープングループ  
《繰り返ししてください》  
(撮影：水上成実)

土屋 恵

今回の横浜トリエンナーレのフィールドワークで最もインパクトを受けた作品は、アメリカの作家、ジョシュ・クライン (Josh Kline) の「失業」シリーズである。スーツを着ている中年の男性や女性が、透明なゴミ袋の中に粗大ごみのように入れられて棄てられている。これは弁護士や会計士、銀行員、秘書などのホワイトカラー労働者が、AIなどの技術革新や社会の変化で20年後にはなくなってしまうかもしれない、大量失業への不安を表現している。しかし、ゴミ袋に入れられている人の表情はとても穏やかであり、少し思いとは違う仕事から解放されほっとしているようにも見えた。



ジョシュ・クライン  
《長年の勤務に感謝(ジョアン/弁護士)》  
《総仕上げ(トム/管理職)》  
(撮影:土屋恵)

私は今回の横浜トリエンナーレの作品のなかで富山妙子氏の作品が印象深かった。彼女の作品からは争いがもたらす悲壮感と憎しみ、思想や言論の自由を手に入れることの難しさが伝わってくる。その中でも『民衆の力I』という光州事件を描いた作品が特に印象に残っている。この作品で民衆が持っている韓国語のローガンは、日本語に直訳すると「共に死んで共に生きよう」という意味になるのだが、なぜ死が生より先なのかを考察することが興味深かった。作品を自由に解釈できるところが美術作品を見ることの面白さなのではないかなとも思った。

柳沢 慶介

私は、エクスパバー・エクサー (Xper.xr) の《機械じかけのおもちゃの猫》という作品に注目した。おも

ちゃの猫は、ロンドンや香港などで行ったパフォーマンズ(ザ・ピッツ、ザザーク・プレイハウス)の小道具として使われていたと知り、おもちゃの猫を道具にするといった発想は頭に浮かばなかった。衝撃を受けた。機械の猫は集合体恐怖症であるエクスパバーが本番前に緊張をほぐす役割を果たしていた。本物の猫と同様に、機械の猫にも癒す力があることに気付いたとき、パフォーマンズの小道具に使われる理由が納得できる作品だと感じた。

寺崎 大悟

私が特に印象に残ったアーティストは、柳沢さんと同じく、エクスパバーエクサー (Xper.xr) である。彼は香港で活動するアーティストで、ミュージシャンとしての一面も持っている。彼の作品は挑戦的な作品が多く、荒れていた幼少期を感じさせる《カウターテーブルトップ》という作品や風刺漫画のTシャツを使った《火炎瓶》という作品が攻撃性を表していると感じた。また、今回の展示で《無題》という作品が2つ展示されていたのだが、そのどちらも赤黒く、まるで血を彷彿とさせる作品であった。彼の作品からあふれ出る世界への反抗心をぜひ多くの人に感じてもらいたい。

池田 亜美香

最近ヴィーガンとベジタリアンの違いに興味を持つ出来事があり、人間をひとつの動物とみているような



エクスパバー・エクサー (Xper.xr)  
《機械じかけのおもちゃの猫》  
2002 (撮影:柳沢慶介)



エクスパバー・エクサー (Xper.xr)  
《無題 1991/2021》  
(撮影:寺崎大悟)

アネタ・グシエコフスカ (Aneta Grzeszykowska) の《MAMA no.22》が私の印象に残った。弱肉強食の社会で当たり前のように食べられている動物だが、それを人間に当てはめているようなそんな作品であった。グシエコフスカの作品全体には人間や犬が登場するが、それらは決して普通の姿で見ることができず、当たり前が当たり前ではないというメッセージを私は彼女の作品から読み取った。今の日常を当たり前だと思わず、小さなことにも感謝の気持ちを持つことを大切にしたいと改めてこの作品を通して感じた。



アネタ・グシエコフスカ  
《MAMA no.22》  
(撮影:池田亜美香)

私が一番印象に残った作品はユア・ブラザーズ・フィルムメイキング・グループ(你哥影視社)によってつくられた《宿舍》という作品である。これは台湾の工場で働くベトナム人女性たちが寮に立てこもってストライキを起した時の部屋を再現した作品である。この部屋の様子を見ると、互いのベッドの距離がとても近い。そのためプライベートの空間がなく、女性たちはこの苦しく過酷な状況の中、遅く生きていたことが感じられる。またこの作品は自身がその場にいるかのような臨場感があり、当時の部屋を再現したことによりダイレクトに世界観を感じることができた。

今回の横浜トリエンナーレのアーティストック・ディレクターが中国人であり、テーマは魯迅が書いた『野草』ということもあり、中国と非常に縁のある点から、私たち中国語学科としても非常に良い経験になった。今私たちが生きているこの時代は非常に殺伐としている。戦争・紛争のニュース、経済格差、政治



的な問題、未来に対する漠然とした不安といった複雑な問題を私たちは抱えている。この殺伐とした現代を野草のように生きていくために私たちは前を向いて互いに協力し、手を取り合い、目の前の課題を一つ一つ解決することが大事なのだと、このトリエンナーレから強く感じることができた。



ユア・ブラザーズ・フィルムメイキング・グループ《宿舍》  
（撮影者：伊東美秋）

## ウェルカーゼミナール 秋葉原探訪レポート

国際日本学部国際文化交流学科

3年 山本拓実

国際日本学部日本文化学科

3年 長谷川天駿



ジェームズ・ウェルカー先生のゼミナールは毎年秋葉原を訪れます。このゼミナールでは日本のポップカルチャー、例えばオタク文化などにあるジェンダーを扱います。その為日本のオタク文化の中心である秋葉原は重要な場所なのです。まず秋葉原駅に集合し、秋葉原の歴史について先生から教わりました。

メイドカフェに訪れると、みんなは中々店の奥の方へと進むのを躊躇っており、前の方にいた私だけ押し出されてしまいました。日本ではオタクが受け入れられるようになってきていると聞きますが、人前でオタクらしい物へ触れようとするのには恥ずかしさを感じるのでしょうか、



メイドさんが即興で書いた猿

実際にはまだ日本ではオタク文化は恥ずかしい文化といった面が残っているのかもしれないと思いました。店内では先生にパフェなどをご馳走になりながら、メイドさんによる会話・おまじない・ダンス・チェキなど、メイドカフェらしいものを楽しみました。メイドさんがオムライスにイラストを書く際にはお客さんにリクエストを聞くのですが、その後、何も見ずにかわいい絵をケチャップを使いながら描いていて感動してしまいました。ダンスをしている時もいろいろなお客さんに視線をしっかりと送っていて、メイドさんの凄さを体感することができました。

その後は秋葉原の散策をしました。秋葉原やオタクと聞けばアニメ、漫画などそういったものを今は思い浮かべますが、訪れたラジオ会馆などにはSF・人形・モデルガンなど、以前はオタクという言葉でアニメ、漫画と一緒に思い浮かべられていたジャンルのお店が残っていました。

散策の後は最後の目的地の明治大学にある米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館を訪れました。この図書館は漫画、雑誌、同人誌、それらに関する学術書など40万冊が所蔵されています。国会図書館では多数の雑誌を管理する為に背表紙をくっ付けて保存します。これによってくっ付けられた面やスタンプで隠れた部分の情報失われています。ですがこちらの図書館は雑誌をできるだけそのままの姿で保存するために、管理用のバーコードなどの情報は別紙に全て記し、状態の保護のためにビニール袋を本全体に被せるという保存が為されていました。これらから雑誌という形を大切にしているということが伝わってきました。特別に通じていただいた4階の書庫では少年ジャンプやサンデー、ちやおを始めとする数え切れないほどの雑誌が

先述した方法で保存されていました。背表紙もすっかり残っているため、例えば少年ジャンプでは先日亡くなってしまった漫画家の鳥山明先生の初連載作品「Dr. スランプ」の連載開始から終了、「ドラゴンボール」の連載開始から終了までの軌跡が背表紙から手に取るようにわかり、背表紙が貴重な情報源であることを実感しました。

私達は雑誌の中の漫画という部分だけに注目しがちですが、雑誌というメディアの形によって付随する情報も漫画とつながった大切な情報という事に気づかされました。

## 台湾国立中山大学との交流セミナーの開催

### 「黄金町フィールドワーク」

### 通して考える地域再生」

### 「観光文化コースのコース演習Ⅰ」

### 崔クラスの取り組み

国際日本学部 国際文化交流学科2年

江原由美・新保みくり・原沢怜佳

氏川晴仁・梅田千帆・松原穂佳・吉田礼萌

若杉日和・阿武弥春・杉原彩華・岩崎真希

坂井勝永・嶋崎結菜・鈴木里奈・増田有紗

### 1) はじめに

国立中山大学西湾学院社会創新大学院の夏休み日本見学クラスを履修する学生10名（社会創新大学院修士学生7名、学部生3名）と教員ら2名の12名が2024年6月22日（土）、神奈川県を訪問した。台湾の学生達は、6月19日から29日までの間、日本に滞在しながら、台湾の社会課題を解決するためのヒントを得る